

展示刀剣解説 長さ等は登録証より抜粋 解説の御太刀 御脇指五振りは登米市指定有形文化財です。

1. 太刀 銘 備州長船恒弘 長さ 72.1 cm 反り 3.3 cm 目釘穴 1 (重要刀剣)

(解説) 恒弘は、南北朝末期に備前国長船(びぜんのくにおさふね)で作刀した多くの刀工中の1人で、同工らを小反り(こぞり)と称している。小ずんだ互の目(ぐのめ)、小丁子(こちょうじ)等の刃文が小反り物の特徴を示しており反り高く付き、生ぶ(製作した当時のままの状態)の姿が貴重で、既に「重要刀剣」に指定されている。

仙台伊達家の三引両紋と蟹牡丹紋(かにぼたんもん)が付いた見事な糸巻き太刀拵(こしらえ)が付属する。

登米懷古館所蔵

2. 脇指 無銘 (古備前正恒) 長さ 44.6 cm 反り 0.8 cm 目釘穴 1 (重要刀剣)

(解説) 大磨上げ(おおすりあげ・太刀や刀を短くしたため、銘の部分がなくなったもの)無銘の脇指であるが、故佐藤寒山博士(明治40年4月、現在の山形県鶴岡市で出生。東京国立博物館工芸課長、(財)日本美術刀剣保存協会専務理事、刀剣博物館副館長、勲3等瑞宝章受章、昭和53年2月逝去・享年70歳)が古備前正恒と極めた脇指であり、元来は太刀であったものか。

古備前派は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて備前国で栄えた鍛冶の総称であり、その中にあって友成と正恒が双璧である。古研ぎのため一見地刃の状態が判然としないが、鍛えの良さと直刃調(すぐはちょうど)に細かな変化に富む刃文に生まれの良さが窺える。

箱書きに仙台藩2代藩主伊達忠宗公の長子虎千代君(後の光宗・7歳で早世)が寛永五年三月十三日、2代將軍秀忠公が仙台藩江戸屋敷にお成りの際に、同將軍から記念として拝領した脇指である旨記されている。

登米懷古館所蔵

3. 脇指 銘 綱宗造 長さ 44.8 cm 反り 0.6 cm 目釘穴 1 (特別貴重刀剣)

(解説) 仙台藩第三代藩主伊達綱宗公(つなむねこう)が逼塞(ひっそく)後、江戸品川藩邸において、三代安倫(或いは二代か)やその師の大和守安定らを呼び寄せ、鍛刀(たんとう)を試みた折の遺作と伝えられる。

付属する外装も全てが緻密な細工で、柄前(つかまえ)の鮫皮(さめかわ)には極上の物を用い、頭(かしら)は角(つの)、縁(ふち)、鐔(つば)等無銘(小柄は在銘)ではあるが龍虎(りゅうこ)の図柄にもこだわりを持って、一流金工の作と思料される豪華で見事な金具(全て上質の赤銅(しゃくどう)[金と銅との合金で、金の含有量が高い])を用い、大名家ならではの贅をつくした脇指拵となっている。

綱宗公の遺作は巷に多く存在するが、そのほとんどは偽作、偽銘であり、この脇指に限っては綱宗公が兄の登米第四代領主伊達宗倫に贈った由緒正しきものであり、その作風からも伝来が肯定される。

登米懷古館所蔵

4. 脇指 銘 三品但馬守宗次 長さ 57.2 cm 反り 1.8 cm 目釘孔 2 (貴重刀剣)

(解説) この長脇指の作者但馬守宗次は、美濃国(みののくに)関の刀工兼道の子の流れをくむ摂津国(せつつのくに)三品丹後守兼道(たんごのかみかねみち)の弟子で、江戸時代中期の寛延(かんえん)頃に摂津国で作刀した刀工である。反り程よく付いた姿に互の目の刃文を焼き地肌は典型的な綾杉肌(あやすぎはだ)で美しく、月山刀工(がっさんとうこう)との関りが窺(うかが)われる。

登米懷古館所蔵

たち めい やすつな

5. 太刀 銘 安綱 長さ 74.8 cm 反り 1.9 cm 目釘穴 3 (貴重刀劍)

(解説) 安綱は、平安末期頃に伯耆国(ほうきのくに)で作刀した、日本刀の元祖とも例えるべき刀工中の横綱であり、源頼光(みなもとよりみつ)が大江山(おおえやま)の酒呑童子(しゅてんどうじ)を退治した際の太刀「童子切り」があまりにも有名である。

この太刀は磨上げ(すりあげ・銘の部分を残して短くしたもの)であり、地刃の現状からして、焼け身(やけみ・火災に遭遇したもの)の可能性を否定できないが、そうであったとしても、いかに大切に伝えられてきたかを学ぶべき好資料である。

登米懷古館所蔵

むめい せきしゅうなおつな

6. 刀 無銘 (石州直綱) 長さ 66.0 cm 反り 1.8 cm 目釘孔 2

(解説) (南北朝時代 正宗十哲(まさむねじゅってつ)の一人)磨上げで身幅が広く、きっさきが伸びた姿が延文・貞治(えんぶん・じょうじ)期の頃のものである。元来は、太刀であったもので茎尻(なかごじり)を折り返して銘の部分を残した形跡がある。

登米懷古館所蔵

7. 刀 無銘

長さ 71.0 cm 反り 1.9 cm

登米懷古館所蔵

わきざし

8. 脇指 無銘

長さ 53.6 cm 反り 1.2 cm

登米懷古館所蔵

ほうしゅうたかだじゅうつなゆきざく

9. 脇指 銘 豊州高田住綱行作 長さ 53.5 cm 反り 1.1 cm 目釘孔 1

(解説) 江戸時代前期の作で、鎬造(しのぎづくり)、庵棟(いおりむね)、地沸(じにえ)が付いた板目肌精美(いためはだせいび)。刃文は、沸出来(にえでき)の直刃(すぐは)で、帽子直ぐに小丸に返る。

登米懷古館所蔵

なが かね

10. 太刀 銘 長包 長さ 75.8 cm 反り 2.1 cm 目釘孔 1

(解説) 鎬造(しのぎづくり)、庵棟(いおりむね)、杅目(もくめ)鍛えに板目(いため)が交じり、地沸(じにえ)付く。刃文は沸勝(にえが)ちの小乱れ、小互の目(こぐのめ)逆ごころの刃交じり砂流し掛かる。帽子は表裏共に直ぐ調に小丸に浅く返り、先掃き掛ける。

継ぎ茎(なかご)の太刀で茎と刀身を繋いでおり、三味線の棹(さお)を繋ぐように接続していることから、これを「三味線継(しゃみせんつぎ)」と称する。在銘太刀等の刀身が欠損して使用できなくなった場合、その茎を利用して別の刀身と繋ぎ合わせるものである。

登米懷古館所蔵

11. 刀 銘	びしゅうおさふねじゅうすけさだ 備州長船住祐定	長さ69.5cm 反り1.6cm 目釘孔2
天正二年二月吉日		
(解説) 室町時代末期の作で、鎬造(しのぎづくり)、庵棟(いおりむね)、区上(まちあげ)で丸留めとなる棒桶(ぼうひ)を彫る。小板目(こいため)鍛えに所々に板目(いため)、杅目(もくめ)交じり、地沸(じにえ)付く。刃文は、沸勝ち(にえがち)の互の目(ぐのめ)に腰開きの互の目が交じる。帽子は、表裏共に乱れ込んで小丸となり、浅く返る		
登米懷古館所蔵		
12. 脇指	わきざし 無銘	長さ51.0cm 反り0.5cm 目釘孔1
(解説) 鎬造、庵棟、地沸が付いた細かな杅目(まさめ)が詰み、鎬地(しのぎじ)は板目に杅交じりの鍛えとなる。刃文は、沸出来(にえでき)の直刀(すぐは)、二重刃(にじゅうは)、食違い刃、砂流し掛かり、帽子は、表裏共に焼き詰め風で先掃き掛けける。大和伝(やまとでん)、国包流(くにかねりゅう)の作刀ではあるが、鎬地が板目鍛えとなっているところが異風である。茎(なかご)に化粧鏃(けしょうりょ)が施されているため、幕末期の国包系の作刀と思料される。		
登米懷古館所蔵		
13. 脇指 銘	たまひで かおう 玉英 (花押)	長さ 51.1 cm 反り 0.9 cm 目釘穴 1
弘化四丁未二月日		
(解説) 玉英は、幕末期に当地(現登米市中田町石森字前田)に住した鉄砲工(工銘定則)でもあり、邑主笠原内記英康(ゆうしゅ かさはら ないき ひでやす)の臣であった郷土刀工である。		
この脇指は、新井龍右衛門雙龍子藤原玉英(あらいりゅうえもんそうりゅうしふじわらたまひで(初代))の弘化4年(1847) 56歳の作刀で、のたれがかった太直刃状(ふとすぐはじょう)の刃文を焼き、刃中(はちゅう)砂流し等が縞状に掛かって盛んな働きを見せ、仙台大和伝国包流の杅目(まさめ)鍛えの伝法を巧みに表現した傑作刀である。これには「雙龍子」の号を用いてはいないが、花押を切り添えてあるのは珍しく貴重である。		
平成11年12月14日付けで文化庁から旧中田町歴史民族資料館に譲与されたG・H・Q(進駐軍)による接収刀剣(赤羽刀)の一振りである。		
登米市指定有形文化財		登米懷古館所蔵
14. 短刀 銘	應山本頼尚需貞俊作	長さ26.7cm 反りなし 目釘穴1
安政元年		
(解説) 江戸時代末期、安政元年(1855年)の作刀。初め、水戸の藩工で、後に白河、白石、涌谷と転住し、涌谷で没した。		
登米懷古館所蔵		
15. 短刀 銘	せんだいじゅうはくりゅうし しげ ながしげ 仙臺住白龍子○繁(永繁)	長さ22.1cm 反りなし 目釘穴1
明治三年十二月日		
(解説) 明治3年の作刀。平造(ひらづくり)、庵棟。板目鍛え肌立ち、棟寄り杅肌現れ、地沸付く。刃文は、小沸出来の互の目が連れて、細かな砂流し掛けかり、帽子は地蔵風で、先僅かに掃き掛け返る。藩工の田代永重系11代白龍子永繁(田代太郎太)の短刀であり、茎の巧込みは惜しまれるが、出来が良い。		
廃刀令施工後は刀物鍛冶に転じ、大正10年(1921)8月歿、多賀城市八幡の不磷禪寺に葬られた。		
登米懷古館所蔵		

16、刀 無銘 (肥前国近江大掾藤原忠広) 長さ70.7cm 反り1.7cm 目釘孔3

(解説) 江戸時代前期の作刀。鎌造(しのぎづくり)、庵棟(いおりむね)、重ね身幅共に尋常で反り深めについて中鋒(ちゆうきつさき)に結び、姿が良い。鍛えは、小板目肌(こいためはだ)が良く結んで地沸(じにえ)一面に付き、小糠肌(こぬかはだ)となる。刃文は表裏共小沸出来(こにえでき)の互の目(ぐのめ)が連なって沸足(にえあし)が長く入り、帽子も表裏共にふくらに沿って直ぐに先小丸に返る。

茎(なかご)が改造されて無銘になってはいるが「肥前国近江大掾藤原忠広」(佐賀鍋島藩お抱えの名工橋本忠吉家2代目)として特別貴重刀剣に認定され作者が極められており、地刃の出来からそれが肯定される。

ちやいどつ ま つかまえくろいしめぬりさやうちかたなこしら
茶糸摘まみ巻き柄 前黒石目塗鞘打 刀 振えが付属する。

縁頭(ふちがしら) 無銘 赤銅地(しゃくどうじ) 卍紋・花菱紋金色絵

目貫(めぬき) 赤銅地 人物鳥図金色絵容彫

鐔(つば) 銘 表 藻柄子入道宗典製

裏 江州彦根住

鉄地木瓜形 唐人觀漠図 肉彫透し 金・素銅象嵌色絵

※ 鐔の作者「藻柄子入道宗典」は名工であり、出来も良い。

登米懷古館所蔵

わきざし めい へいあんじょうじゅうときぐにさく てんしょふう
17、脇指 銘 平安城住刻国作(篆書風・ときぐに) 長さ45.0cm 反り1.4cm 目釘孔1

(解説) 鶴の首造(うのくびづくり)、庵棟、鎌地を薄く削ぎ取り、鎌が高く身幅広い。鍛えは板目に杢目(もくめ)交じりで地沸付く。刃文は表裏共に小沸出来の互の目乱れで丸形の飛び焼き入り、帽子は表裏共に直ぐで先小丸風に僅かに返って掃き掛ける。

山城国堀川国広(やましろのくにほりかわくにひろ)の門出羽大掾国路(でわだいじょうくにみち)の門人である初代信濃大掾忠国(しなのだいじょうただくに)の中年期(江戸時代初期の寛永6年から同9年頃)の作刀であり、刃文に美濃風が漂う。数多き刀工中、篆書風の銘を切る刀工は珍しい。

登米懷古館所蔵

18. 刀 無銘 伝 兼延 長さ73.0cm 反り2.1cm

(解説) 亘理宗根が伊達政宗から拝領したという伝承がある。兼延は室町時代後期に活躍した美濃の刀匠である。

登米市歴史博物館所蔵

19. 大脇指 銘 相州住廣光作 長さ55.2cm 反り1.5cm

(解説) 廣光は、相模の刀匠で、室町時代後期の作刀である。

登米市歴史博物館所蔵

20. 短刀 銘 びしゅうおさふねむねみつ
備州長船宗光 長さ16.6cm 反りなし

明應五年二月日

(解説) 宗光は室町時代後期の備前長船の刀匠である。この短刀は明應(めいおう)五年(1496)の作刀である。この短刀は、亘理家より高橋家に嫁入りの際にもたせたものである。佐沼亘理家ゆかりの刀剣である。

登米市歴史博物館所蔵

21. 洋劍合口拵 ようけんあいぐちこしらえ
外装(こしらえ) がいそう くろいろかわいしめぬりようけんあいぐちこしらえ
黑色皮石目塗洋劍合口拵

(解説) 江戸初期に製作された西洋短剣風の合口拵(あいぐちこしらえ)であり、鞘(さや)に小柄櫃(こづかひつ)が付いた腰刀(こしがたな)として帯に差す形式ものと、吊輪(つりわ)が付いて帯(おび)に紐(ひも)で吊り下げる形式の替鞘(かえさや)が付属する変わり拵である。

仙台伊達家に伝來したことが重要小道具指定の際に発行された図譜(ずふ)の解説に記されており、それに支倉六右衛門常長(はせくらろくえもんつねなが)が帰国の際に持ち帰った洋剣拵を倣つたものとある。

登米懷古館所蔵

22. 雲龍金襷の刀袋 うんりゅうきんらん かたなぶくろ

(解説) 伊達政宗公御使用の刀袋と伝わっている。唐の織物で出来ている。

登米懷古館所蔵